

五四時期廢除考試運動考

森 川 裕 貫

は じ め に	105
I 試験廃止論の提起	106
II 試験改良論者の登場	110
III 『星期評論』の試験廃止論	114
IV 優勢を占める試験廃止論	115
V 試験廃止運動の顛末	117
VI なぜ試験廃止論は生じたのか	121
VII 試験廃止運動の限界	123
結びにかえて	125

は じ め に

1920年7月、北京大学廢除考試研究会なる団体の署名が入った「廢除考試制度的宣言」という宣言文が、上海の日刊紙『時事新報』の副刊『学灯』に掲載された⁽¹⁾。この宣言は、「現在の教育制度の不良については、改革すべきことが大変多いのだが、そのなかで最も重要なのは、試験制度である」と切り出している。その理由は、試験が「学生の研究精神を助けられないばかりか、その精神を喪失させるのに十分である。学生の天賦の才能を發展させられないばかりか、その天賦の才能を損なうのに十分である。学生の可能性を増進させられないばかりか、その可能性を消失させるのに十分である。人格を完成させられないばかりか、人格を破壊するのに十分である」点にあった。ここから同研究会は、この「極悪非道な試験制度」を廢止せぬまま放置するのは、「人類を殺す」、そして「社会を損なう」ことに等しいと指弾し、試験制度の即時廢止を求めた。

北京大学廢除考試研究会はまた、試験制度の廢止およびそれに附随する卒業や学位と

いった制度の廃止を骨子とする教育制度の改革によって、「人々は平等となり、文化は日に日に進み、世界は大同となり、限りのない幸福が訪れると断言できる」との見通しも公表している。大同の世の到来と結びつけるほどまでに、試験の存廃に注目していたのである。

民国時期、特に1919年から1920年のいわゆる五四時期にかけて、中国では「廃除考試（試験廃止）」運動と呼ばれる運動のなかで、学校の試験をめぐるこうした議論が、真摯な検討の対象になっていた。そしてこの運動のさなか、なぜ学校の試験を廃止しなければならないのかについて、様々な論拠が提示される一方、それに対する反対意見も表明され、論争が巻き起こった。本稿は、特に試験廃止を訴えた側に着目しながら、この論争の具体的様相、およびその思想的背景に分析を加えるものである。

1919年5月4日の五四運動については、5月4日の出来事についてはもちろんのこと、それと関連する運動、思想、社会現象についても多くの研究が蓄積されてきた⁽²⁾。しかし、試験廃止をめぐる論争については、いくつかの研究成果が公表されてはいるものの、本格的な検討はまだなされていないというのが現状である⁽³⁾。だが、この論争は内容が刺激的というだけではなく、その担い手を突き動かした思想的背景にも興味深い点が見られ、詳細な考察に値する。

なお、当時「廃除考試」という場合、大学をはじめとする各種学校での試験廃止を基本的に意味している。本稿も、この意味での「廃除考試」を分析の対象とすることをあらかじめことわっておく。

考察を進めるにあたり、民国の学校において、試験がどのように位置づけられていたのかをまず確認しておきたい。

民国建国ののち程なく、教育部部令として、「学生学業成績考査規程」が出されている。この規程では、大学以下の各種学校における学生の学業成績は、平時の成績と試験の成績から構成すること、試験の成績については、原則として、学期試験、学年試験、卒業試験に基づいて算出することなどを定めていた⁽⁴⁾。

つまり民国の学校では、学生の成績評価のために試験を実施することが、教育部により義務づけられていた。教師にとっても学生にとっても、試験は学校教育に大きな意味を占めるものであり、無視することが許されない制度として存在していたのである。

I 試験廃止論の提起

民国成立ののち、教育部部令によって、大学以下の各種学校では成績評価のための試験が実施されていた。だが、試験の実際のあり方に対しては、不満も噴出していった。たとえ

ば、学校での試験が、講義やテキストの丸暗記を事実上強制しており、その結果、「生徒のエネルギーを摩滅させ、学生が各自の才能を究めて、新機軸を打ち出すことが不可能となっている」、「学生が虚栄を争い、実学に従事しない」、「試験の採点がいつも公平でない」、「試験を実施すると、不正が百出することは、科挙の時代に劣らない」といった弊害が生じ、学生が憤っていることが報告されている。この報告者自身は、試験そのものにはなお意義があるとも考え、「貴学（学問そのものの尊重）」、「修品（人品の修養）」、「廃分（点数による評価の廃止）」という方策で対応するよう提案している⁽⁵⁾。だが、そもそも試験の存在が、ここに列挙されたような弊害を生んでいるのだから、試験そのものを廃止してしまえばよいと訴える論説も発表されていた⁽⁶⁾。

このような試験に対する疑念、あるいは試験制度廃止を唱える議論は、1919年になって大きな広がりを見せることになる。その背景に、従来の価値観・秩序に挑戦する新文化運動の進展があったことは、疑いがないだろう。

こうしたなかにあって、議論を一挙に高揚させるきっかけとなったのは、1919年の春節休みに開始された、北京高等師範学校における試験廃止運動である。同校で発行されていた雑誌『高師週刊』に、試験制度を批判する文章が掲載されたのを皮切りに、同校の学生たちは『学灯』、『北京大学日刊』、『北京大学学生週刊』など、そのほかの媒体にも次々と試験廃止を訴える文章を投稿し、運動は盛り上がっていった。

1920年2月には、学生主体の考試制度研究会（試験制度研究会）が成立し、数回の会合を経て、臨時、学期、学年、卒業の四種類の試験を廃止することを決議した。また学生とは別に、教職員も考試制度研究会を組織して、学生側の研究会と歩調を合わせ、その結果、北京高等師範学校では上記四種類の試験の廃止が公布されたという⁽⁷⁾。

なぜ、北京高等師範学校ではこのように熱心な運動が展開されたのか。同校の学生である馮克書は、「全国で教育を研究する最高機関の一つである」北京高等師範学校の学生として、教育問題およびその一角を占める試験をめぐる問題について、研究を深めなければならないとの強い思いに駆られていたのだと述懐している。そしてだからこそ、山東省の問題が緊急を告げ、大半の人々の注意が外交方面に向いていたときに、北京高等師範学校では考試制度研究会を組織して試験制度についての検討を行い、その結果、試験廃止を決定したのだと説明している⁽⁸⁾。

山東省の問題とは、1919年1月より開かれていたパリ講和会議において、山東利権の返還を求める中国と、それを拒絶する日本との間で対立が生じたこと、この対立について、講和会議は日本側に山東利権を譲渡すると裁定したこと、この裁定への反発として五四運動が生じ、学生や労働者が全国各地で日貨排斥やストライキを展開したことを指している。

このさなかにあつてすら、馮克書らは試験制度に多大な関心を寄せ、その廃止に向けて尽力したというのである。北京高等師範学校で試験廃止運動を主導した学生たちは、概ねこのような思いに突き動かされていたのだろう⁽⁹⁾。

それでは彼らは現行の試験に、具体的にどのような問題点を見いだしていたのだろうか。まず目につくのは、試験が記憶ばかりを重視しているとした上で、「こうしたもっぱら記憶力を試す試験は、学生が思想を発表し判断する余地をもたせているのだろうか」といった批判が繰り返されている点である⁽¹⁰⁾。学生が教科書や教員の講義をひたすら暗記するよう強いられ、自由に思想を展開できなくなっているといった論難がなされているのである。

また、「教員の心理に迎合した答案」のみが事実上求められるために⁽¹¹⁾、「機械的でとくに死んでも当然の人物が生み出され、社会の必要に適用できない」状態を招いているといった批判もなされている⁽¹²⁾。試験を通じた成績評価に確固とした基準が存在しないために、事実上教師の専断が横行し、学生はそれを受け入れざるを得ないという状況が生じていると捉えられていたのである。そしてこうした状況に置かれた学生は、点数や成績ばかりを気にするようになり、カンニングをはじめとする不正に駆り立てられるようになつていた。

学生をこのように追いつめる試験は、しばしば「機械考法」と揶揄され、糾弾されてもいた。「機械考法」が、次のような様々な精神的・身体的問題をもたらしていたからである。

たとえば、学生を成績の優劣に拘泥させるあまり、うぬぼれ、わがまま、墮落、自暴自棄を生じさせていること、学生が試験のために、昼夜を問わず暗記に励む結果、睡眠不足、眼疾、精神疲労、運動不足、起臥障害、飲食障害、脳の障害、脳の充血、神経衰弱、遺精、神経病、腰の湾曲、猫背、黄疸、骨の劣化に苦しむ者が出ていること⁽¹³⁾、またそのほか、吐血、飲食の減少、体重の減少、排泄物の変色などが一部の学生に生じていることも報告されていた⁽¹⁴⁾。

さらには、一回の試験期間が長すぎることも憂慮されていた。試験期間は毎回一週間に及ぶが、これは春節休みの長さに等しく、青年の貴重な時間が無意味な試験に浪費されていることが問題視されていた⁽¹⁵⁾。

これら多岐にわたる弊害のなかでも、とりわけ深刻なものと捉えられていたのが学生の自殺である。試験により生じた自殺の事例は、いくつか伝えられているが⁽¹⁶⁾、注目に値する顕著な事例の一つに、南京で生じた案件がある。この案件は、それを報じた記事によると、次のようなものである⁽¹⁷⁾。

南京青年会求実中学2年生の江期豫は、英語の「月考〔毎月実施される試験であろうか?〕」で、カンニングを行い、それが発覚してしまう。カンニングの事実を指摘された江期豫は、「教室を出て自室に帰ったが、あまりの恥ずかしさに、顔を上げて人と向き合うことをしなかった」。そして彼は、遺書を残して自殺する。遺書には、「私は平素から実直で誠実であると自負しておりましたが、〔試験の際に〕本をもっているところを偶然試験官に見られてしまいました。これは第一に張先生の期待に背くものであり、第二に私の名誉を台無しにしてしまうものです。今までとこれからを考慮してみましたが、よい方法がないので、死をもって自分の品格を明らかにすることにしました」と書き記されていた。「張先生」が、南京青年会求実中学の教員なのか、あるいは郷里で世話になった人物なのかははっきりしないが、いずれにせよ江期豫が深く尊敬する人物なのだろう。遺書にはこのほか、父母の名誉が傷つくことへの恐れ、同級生に合わせる顔がないといった羞恥の念も吐露されていた。遺書からは、江期豫が精神的に深く追いつめられていた様子が読み取れる。

この遺書には、記者による案語も附されている。案語によると、江期豫は安徽省の出身で、このとき18歳であった。彼は南京にやってきてから2年あまり、終日学問に励み、同級生から大変尊敬されていた。にもかかわらず、試験における些細な過ちが原因で、江期豫は身を投げて絶命することになったと整理した上で、記者は「無限の感嘆を禁じ得ず、今日の試験制度の罪惡を痛恨し、嘆息せざるを得ない」ともらしている。そして「責任ある者が、根本的な研究を加えて早急に改革をしなければ、今後、学校で試験によって命を落とす者は、江君一人にとどまらないだろう」と、試験制度に対し迅速な対応が必要だと説いた。

ここでは、カンニングという行為が責められることはなく、学生を自殺にまで追いやる試験制度の害惡のみが糾弾されている。この記者から見て、江期豫のような学生に罪はなく、学生にカンニングをさせてしまうような試験のあり方が問題なのである。

以上のように、軽度の不調から自殺という深刻なものにいたるまで、数多くの弊害を抱える試験は、「数千万の学生の心血と時間」を、「すり減らす」もので、そのために学生の「心持ちは愚かになり志願は灰になっていく」と認識されていた⁽¹⁸⁾。そして、「こうした旧式で受動的で機械的で圧制的で奴隸的な方法」にほかならぬ試験は⁽¹⁹⁾、「変相的な科举」であって⁽²⁰⁾、「独立自治共和国〔たる中華民国〕の国民性」により影響を与えるはずがないと⁽²¹⁾、国民性にまで波及する問題として憂慮されていた。

だから、速やかに試験を廃止しなければならないというのが、試験制度の問題を糾弾する人々の総意であった。こうした主張をする人々を、試験廃止論者と呼称することも許さ

れよう。

この試験廃止論者はしかし、成績の考査そのものを完全に否定したわけではない。彼らは、試験とは異なるやり方を用いて、成績をつけようとも提案していた。

具体的な方策として、ノートの点検や質疑応答⁽²²⁾、論文の執筆⁽²³⁾、テキストの読解に基づいた報告、調査採集や実験実習、弁論会、学芸会、運動会などの行事への取り組みが挙げられており、またこれらの方策の助けとするべく、図書館の設立も唱えられている⁽²⁴⁾。加えて、怠惰であったり精神が不安定な学生のために研究会を設け、そうした学生の学習を助けることも提起された⁽²⁵⁾。

II 試験改良論者の登場

試験廃止論者の主張に対しては、強力な異議も申し立てられていた。異議を表明した人々は、試験には効用も存在することを強調し、試験存続の必要を訴えたのである⁽²⁶⁾。

その論拠はたとえば、試験を通じて教師の側は従来の教授法の結果を知り、以後の教授法の方針を立てる参考にできる一方、学生の側は従来の学習法の結果を知り、以後の奮起を督促し、学習の方針を立てるのに役立てられるといったことにあった⁽²⁷⁾。特に筆記試験については、記録が残るために容易に誤りを発見でき、教員と学生がそれに基づいて共同で討論を行い、双方を高めることに資するとも期待されていた⁽²⁸⁾。

したがって、試験廃止に異議を申し立てる人々にとって、「試験は本来よいものである」のであって、廃止の必要はまったくない。だが、現実には試験廃止が盛んに唱えられている。ではそのことを、彼らはどのように評価したのか。大きな問題となっていた学生の自殺に対しては、彼らもそれを確かに「気の毒だ」とはするものの、「彼〔自殺した学生〕の自殺は虚栄心が作り出したもので、試験制度そのものの罪悪ではない」と断じている⁽²⁹⁾。自殺の発生を理由に、試験制度を廃止しようとするのは見当違いなのである。

試験存続を唱える論者にとって、試験廃止運動は、「盲目的な群衆心理」に動かされたものだと思っていた。彼らによると、盲目的な運動によって、「教育界に重大な変化が生じるかどうかはわからない」、つまりよい効果が得られるとの見通しは立っていない。にもかかわらず、運動を続けるのは、「一部の軍人が、兵士の動乱を使って給与引き上げを求めるようなものだ」と酷評された⁽³⁰⁾。「本来よいものである」試験を、授業ボイコットや学校を休校に追い込むという「脅迫的な手段」によって廃止しようとするのは誤りなのである⁽³¹⁾。

しかし注意が必要なのは、試験の存続と効用を主張する論者が、現行の試験に満足して

いたわけではまったくないという点である。彼らは、試験の弊害とその改良の必要をも強く訴えていたのであり、彼らを試験改良論者と称することも許されよう。彼らは試験の問題点を指弾し、その改良を目指して手を講じようと努力を重ねてもいたのである。

彼らが具体的に指摘した弊害として、学生の品性を墮落させる、学生の弁別能力を失わせる、学生の身体を妨害する、家庭や社会に根強く残る科举以来の虚栄意識を増進させている、嫉妬心を高める、夜更かしやカンニングを常態化させ人格の喪失を招いている、といったことが挙げられる⁽³²⁾。加えて、試験改良論者がことのほか問題視したのは、試験を通じた成績考査において、明確な評価基準が欠如し、教師の専断が横行していることだった。その改善策として、到達度に応じて明確な基準を作る、試験を補完する機構として研究会を組織し活用する、といった方策が唱えられた。研究会とは、学生を主体とし、教師は顧問という位置づけで構成されるもので、研究の対象となる問題は、教科書に関するものに限られず、教師と学生はいずれも問題を提出する権利を有するとされた。そして、この研究会での活動を通じ、学生の研究習慣を養成して思考能力を高め、また学生の自治自学の精神を明確にすることが期待された⁽³³⁾。

そのほかの改善策として、点数による評価を廃止し、科目ごとに赤丸と黒丸によって評価を行うという方策も提起された。赤丸は学生がその科目をきちんとこなしていること、黒丸は学生がその科目をもう少し時間を割いて研究しなければならないことを意味しており⁽³⁴⁾、このようにして学生間の競争心や嫉妬心をあおることを抑制し、人格破壊を招かぬことが期待された。

試験が長期間にわたる点についても、批判的なまなざしが向けられている。たとえば年に2回、暑い時期と寒い時期に行われる期末試験が、学生に「蘇秦刺股」や「映雪読書」を強いているとしてそれを廃止し、代わりに30分間の試験を毎週実施するという案が示された。これには、短時間の試験を複数回に分けて実施することで、前述したような、試験のもたらす様々な弊害を減らせるのではないかというねらいがあった⁽³⁵⁾。

加えて、「試験の本意は、真に正しい学問を考査することであり、学生が一定の復習期間にどれだけ丸暗記する能力をもっているかを試みるものではない」といった言明によく表現されているように⁽³⁶⁾、丸暗記偏重への敵視が見られることも、試験改良論者の特色である。この丸暗記偏重を改善するために、科目の特徴に応じた細かな対処が提案されている。

たとえば中国語や外国語、歴史については、「こうした類のものは試験しなければならない」。つまり、これらの科目については試験はやはり必要で、意義があるのである。ただし、「試験をするのに、機械的記憶を重んじる必要はない」。語学や歴史のような科目に

は記憶という作業は必須だが、事細かな記憶は必要ではなく、大勢の理解が重要である。人物の生没年を正確に覚える必要はなく、何世紀の人物であるかを理解していれば十分であるし、またフランス革命やアメリカの独立といった重要な出来事がいつ生じたのかは、学習の過程で自然と覚えてしまうもので、無理に覚え込む必要はないのである⁽³⁷⁾。

これらの科目に対して、推理を重視する数学や物理のような科目は、記憶をしても私たちの学問を進展させるわけではない。そうである以上、記憶できているかどうかを確認する試験をするのは、「機械的試験」にほかならず、「学生の徳性、智力、体育と衝突を生じる」ことにつながるので、「当然絶対に廃止しなければならない」とされた⁽³⁸⁾。

試験から生じる弊害と関連して、授業改善の必要が提起されていることも興味深い。この提案によると、中国の学校の教員は、「ただ授業をすることを知るだけである」。すなわち、教壇で一方的に口述するのみである。それに対し、たとえばドイツの大学では、教師は授業を行わず、参考文献を示して、みなで相互に研究し、わからないところは自由に討論するという形式を採用している。そして中国の学校でも、このドイツの形式を採用しようというのである。その背景には、「現在は共同討論の時代である。われらはどうあっても、成熟していない理想を脅迫によって実現しようとしてはならない」との認識があったようである⁽³⁹⁾。

また、長すぎる授業時間にも問題があるとされた。現状は、1日平均5時間となっているが、これでは教員の精力は十分に対応できない。また特に神経の衰弱している学生は、勝手な空想にふけるか居眠りをしてしまうとされ、短縮の必要が提起された⁽⁴⁰⁾。

こうした一連の改革案は、学生の負担を軽減しつつ、学生の自主性を従来よりも尊重して試験と授業を運用し、学生の進歩を目指すものだったといえるだろう。そしてここまでの議論から、試験廃止論者と試験改良論者には、実は多くの共通点が存在していたことに気づかされる。

まず両者ともに、現行の試験に問題点があると考えていた。その問題点の具体的内容についても、曖昧な評価基準、記憶偏重、科举との類似性、身体的・精神的に学生を傷つけるといったものなど、概ね共通している。また、現行の試験を糾弾する一方、その改善策を検討する過程で、学生の自主性を従来よりも尊重し、授業のあり方として研究会などの活用を模索する点も、試験廃止論者と試験改良論者双方に見られる特徴である。

このように、両者の違いはそれほど大きくないようにも思われるのだが、実際には相違点が存在していたことはやはり否定できない。

試験廃止論者と試験改良論者の相違点として想起できるのは、これまで述べてきたことから明らかなように、試験廃止論者が試験の即時廃止を唱えたのに対し、試験改良論者

は試験の効用を評価し、その存続と活用を模索したということである。この相違の背景には、学生の学習を進展させる上で、学生の「自律」を完全に信用できるとする立場と、「他律」という外部からの何らかの圧力も必要とする立場の対立が存在していた。

他律を必要とするのは、試験改良論者である。なぜ他律が必要なのか。それは、「われわれは往々にして怠惰な性質をもっている。この怠惰な性質は、完全に自律のみを用いて拘束すれば、頼りのないときがある」からであり、「だから、他律に依拠して、拘束を加えなければならないのである」とされた。

では、具体的に何が他律を担保するのか。それは試験である。試験改良論者によれば、「試験とは己に対するもので、人に対するものではない。試験は環境の圧力であり、それに依拠してわれわれの内部の能力を督促し、われわれの研究の興味を引き起こす」ものである。「試験の本意と効用は、本来このようなものであ」って、「それ自体には欠点がないばかりではなく、きわめてよいものであり、不可欠の方法である」とまで評価されている⁽⁴¹⁾。その効果を十分に引き出すためには、現行の試験の大幅な改良が必要にしてでもある。

試験改良論者のこうした見解は、次の文章にもよく表現されている。すなわち、「人性がすべて善であるとする純粋な自律主義と、人性がすべて悪であるとする純粋な他律主義は、同様に不完全である。人はいつも純粋に自律的でありたいと望むが、しかし事実において純粋な自律が頼りないことはわかっており、だから他律主義を完全には放棄できない。試験により学生の復習を催促すれば、学生の自主が当然失われる。だが、試験がなくなれば、そうした〔試験を課されるので学習せざるを得ないという〕受動性すら失われる。それはさらに悪いのではないか。いま、試験の廃止を主張する人は、人性がすべて善であるとする純粋な自律主義を迷信して、人性をすべて悪であるとする純粋な他律主義を少しも研究していない」⁽⁴²⁾。試験改良論者は、試験という他律のみに依拠して学生の学習を進めようとしていたのではなく、前述の通り、学生の自主性、つまり自律も相当に尊重していた。しかし、自律のみで学生が学習を進展させ成長していけるかは疑わしいという念を試験改良論者は払拭できず、試験という他律的手段により、学生の学習を促す必要にも注意を喚起せざるを得なかったのである。

だが、試験廃止論者には、試験改良論者のこうした見解は受け入れられるものではなかった。試験廃止論者から見ると、他律的手段への依拠は、学生を外部の動力によってはじめて作動する「工場の機器」と同一視することであって、いかなる理由に基づくのであれ、許されるものではない。「学生に迫って学習させ、学生の怠惰な性質を打破し、学生に他律を加えるといったことは、学生の人格蔑視にほかならない」のである。「いまは20世紀であり、平民主義の時代である。教育の方法も、現代の思潮に適応させなければならない」

とする試験廃止論者にとり、試験をはじめとする他律は現代の思潮に逆行している。そうである以上、試験によって、「学生を圧迫して学習させるのは非常に間違っている」というのが彼らの評価であり、試験改良論者との間に歩み寄りの余地を探るのは困難だった⁽⁴³⁾。

Ⅲ 『星期評論』の試験廃止論

試験廃止論者と試験改良論者双方の論点を整理してきたが、上記の内容にはとどまらない観点からの試験制度批判が見られた点にも、注意を及ぼしてよいだろう。それを主導した一つの媒体が、上海で発行されていた週刊誌、『星期評論』である。

『星期評論』は1919年6月に創刊され、翌年6月に停刊している。発行期間は長くはなかったが、中国でのマルクス主義伝播に、大きな力を果たした雑誌の一つであるとの評価を受けている。この雑誌は、国民党の指導と財政的援助の下に発行され、戴季陶と沈玄廬⁽⁴⁴⁾が主編を務めていた。

『星期評論』誌上では、学校本来のありようが、「学校は人を教え、本能を発展させる機関である」と定義されている。だがその現状は、「財産のある人でなければ入学できない」ために、「資本階級が利益を独占する場」となっているとして認定されていた。資本階級が学校を壟断し、多くの人々から学びの場を奪ってしまっているというのである⁽⁴⁵⁾。

『星期評論』の議論ではまた、資本階級ばかりではなく、知識階級も敵視されている。「知識階級」というのは、搾取階級の資格を有しているというのとほぼ同じである」と、知識階級が搾取階級と同一視され、糾弾されている。そして、この知識階級形成に与って力があるのが、「知識階級を製造する機関である」学校」であり、そこで実施されている試験だった⁽⁴⁶⁾。

この認識から『星期評論』では、現行の試験が、科挙制度同様、「搾取階級に入るための資格を得る手段であり、また階級制度の下で必須の手段でもある」、つまり搾取階級を再生産するものとして、その廃止が唱えられた。『星期評論』の議論は、階級という概念が前面に押し出されている点からも明らかなように、同誌が受容と紹介に努めていたマルクス主義の影響を色濃く反映した試験廃止論だといえるだろう。

このような主張に対しては、試験改良論者から疑念が呈された。それは、「現在、平民が学校に進み知識を受ける機会がないのは、試験と卒業制度の障害を受けているからではなく、経済的圧迫を受けているからだ。いま、どのようにして経済的圧迫を取り除くかを語らず、試験と卒業という二つの制度の廃止を高談するのは、おかしくはないか」⁽⁴⁷⁾といったものである。すべての問題の原因を、試験や卒業に帰するかのような議論は、あまりに

極端・非現実的であり、むしろ「経済的圧迫」を取り除くための現実的な方法を検討しなければならないとの考えが、この批判の根底に存在していた。この批判の是非をめぐって、両者の間で意見のやりとりが何度か交わされたが、議論は平行線をたどるばかりで、深まりを見せなかった。

IV 優勢を占める試験廃止論

試験廃止論と試験改良論を比較してみると、過激な言辞を用いて議論を展開する前者がより注目を集め、勢いがあったといえるだろう。北京高等師範学校で始まった試験廃止運動は、北京にとどまらず上海などの複数の学校にも波及していったようである⁽⁴⁸⁾。そしてこの運動は、中国を代表する大学である北京大学で大きな盛り上がりを見せることになる。

その中心となったのは、北京大学学生会によって1920年1月に創刊され、同年5月に停刊した『北京大学学生週刊』である。執筆者のなかには、のちに北京大学で成立した無政府主義者の組織、互助団の成員が含まれており、また、*La Studentaro de la S'tata Pekin-Universitato* というエスペラント語の雑誌名も掲げていたことから明らかなように、同誌の論調は、無政府主義的かつ革新的性格を基調としていた。

創刊にあたって同誌は、「われわれの目的は、積極的な方面からいえば、新しい道徳、教育、経済、文学、そして愉快で美しい社会を創造することである。消極的な方面からいえば、数千年にわたり遺伝されてきた虚偽、束縛、階級、因習、権力争いの道徳と制度に賛成しないことである」と宣言した⁽⁴⁹⁾。同誌に集う人々は、中国の現状に不満であり、それを看過せずに改めるという意向を鮮明にしたのである。

このような性格を帯びる『北京大学学生週刊』は、教育について「教育の自由とは人々が自由に教育を受け、制限がないことである」との見解を示していた。ここから、「幼稚園から大学院にいたるまで、費用は一律に徴収しない」、つまり学生に対して金銭的負担をかけてはならないと唱えると同時に、試験制度に対して、「試験制度は生理的かつ心理的に多くの悪弊を生み出すものであり、われらの理想に最も適さないものだ」との徹底した拒絶を表明し、「現在の試験制度は完全に破壊する」必要があるとの訴えを提起した⁽⁵⁰⁾。

具体的な措置としてはたとえば、16歳以上の学生について、「学生の自由な研究、自由な聴講、自由な転学をすべて許し、進級や留年、進学や留学もすべて学生に決定させ、成績の考査を行わない」といった方策の提言や⁽⁵¹⁾、試験廃止に向けて活動する「廃止考試研究会」の発起などがなされている⁽⁵²⁾。

だがなんといっても、こうした『北京大学学生週刊』の試験に関する主張のなかで、と

りわけ耳目を集めたのが、同誌の活動にも参画していた哲学系一年級学生、朱謙之による「試験に反抗する宣言（「反抗考試宣言」）」である⁽⁵³⁾。

この宣言において朱謙之はまず、記憶、暗記、試験を重視する現在の教授方法について、アメリカの哲学者ジョン・デューイが下した評価を紹介している。それによると、アメリカの農家は鶏を売る際に、少しでも高く売ろうと腹一杯食べさせる。だが、鶏はいったん腹一杯となってしまうと、もはやえさを食べようとしない。このようなとき、アメリカの農家はどうかという、特製の管を鶏の喉に設置して食べ物を流し込み、さらに鶏を太らせようとする。デューイの見立てでは、現在の教授の方法は、このやり方と同様、過度の詰め込みをその特色とする。そして試験は、農家がはかりを用いて鶏の重さを量るという行為に相当する。

デューイの見解をこのように整理した朱謙之は、「私、朱謙之はこの啓発を受けて、「鶏の重さを計測する形式」の試験は、どんなものであれ受けないといま宣言する」と表明し、さらに「あなた方は、まさか「秤」の上に載せられたいのか？あなた方は、なぜ反抗的態度を示さないのか？私は諸君の覚悟がすでにできていると思っているし、あなた方はみな、非人間的待遇を受けたくないでしょう。ならば、どうか声をそろえて反抗していただきたい。諸君に試験の答案を書き記す「筆」を捨て去っていただきたい」と、ほかの学生たちも試験を受けないよう呼びかけた。

朱謙之の宣言は、北京大学当局にとって放置できる性質のものではなかったようで、教授を務める傍ら、校務の執行にも大きな役割を果たしていた蔣夢麟が対応した。蔣夢麟は試験をめぐる問題について、二つの対処方法を示した。一つは、卒業証書を必要としなければ、試験は課さないというものであり、もう一つは、卒業証書が必要であれば、試験を受けなければならないというものである。

蔣夢麟はこの原則が運用されている事例として、ドイツの大学を挙げている。蔣夢麟の理解では、ドイツの大学には試験がなく、人々の学習は自由に任せられている。しかし、卒業して卒業証書が必要であれば、卒業前に厳格な試験を受けなければならないとの規則が存在していた。蔣夢麟は、この規則は北京大学にも適用できると考えており、卒業証書を求めるならば試験を受け、それに合格することが必須となるとの指針を示した。もちろん、試験を受けないことは自由だが、その場合は北京大学の卒業証書は付与し得ないというのが蔣夢麟の考えだった。

蔣夢麟の以上の回答に対する朱謙之の返答は、「私は絶対に卒業証書を必要としない。一方では卒業したいという盗人をあざ笑い、一方では試験の廃止を主張する者である」というものだった。卒業証書は自分には不要という立場をまず明らかにした上で、卒業や試

験に固執する者を「盗人」と呼んで軽蔑し、自らはそうした輩と縁を切るとの姿勢を鮮明にしたのである⁽⁵⁴⁾。

『北京大学学生週刊』の試験廃止論は、前述した『学灯』などで展開されていた試験廃止論を、より急進的に展開したものといえるだろう。学生は自由な存在でなければならず、その自由は試験などによって制約されてはならないのである。それでは、この何者にも制約されない自由を求めた試験廃止運動は、こののちどのような推移をたどったのだろうか。

V 試験廃止運動の顛末

試験廃止運動のその後について、まずその主要拠点の一つであった北京大学の動向を、当時の新聞報道に依拠して、確認しておこう。

1920年6月3日、北京大学学生会の代表が、当該学期の試験廃止を実現するべく大学当局との直接交渉に臨んだ。大学当局からは、校長蔡元培のほかには教務長の顧孟余、そして蔣夢麟、胡適、馬寅初ら教授陣が出席した。

記事では学生内部で、試験廃止運動に対する意見が一致していないとの観察が示されている。誰もが試験廃止を訴えていたわけではなく、「卒業証書もいらず、試験も受けないと主張する者がいるが、そうした人々は結局のところきわめて少数である」というのが運動の内実だった⁽⁵⁵⁾。

記事はさらに、試験廃止運動を推進する勢力の内部には、二つの立場があるとも伝えている。

第一の立場は、恒久的に試験廃止を求める朱謙之らのものである。この立場は、「朱らは本校〔北京大学〕で真剣に勉強している人々であり、試験のないことが確かに彼らの学習の進展に役立つ」と評されている。しかし、この立場に賛同する学生の一部は、「一生懸命勉強している人ではなく、心から卒業証書がいらないとする人でもない」との指摘もなされていた⁽⁵⁶⁾。

第二の立場は、暫時の試験廃止、つまり今学期の試験廃止を求めるというものである。その背景には、今年度は「罷課（授業ボイコット）」の頻発により、休講が大変多かったという事情があり、この立場に賛同する学生は、今学期の試験を停止し、代わりに休講分の補習を行うよう求めたのである。ただし彼らのなかには、「実際には卒業証書をなお得ようと主張し、試験をなお行おうと主張している」者が、実のところ存在しているとも言及されている⁽⁵⁷⁾。

そして第一の立場と第二の立場を比較すると、第二の立場が優勢を占めていたと記事は

報道している。同時に見過ごせないのは、第一の立場と第二の立場双方の内部に、表向き標榜されている主張とは異なった、隠された動機をもつ者たちが存在していると分析されていた点である。記事によれば、彼らはいずれも、自己の卒業証書の行方に執着しており、試験廃止を唱えたり補講を求めたりしているのは一時の方便にすぎない。卒業証書が受け取れるならば、実際には試験の存続も容認しかねないのである。したがって、思想・信条から試験廃止を求める学生は少数であり、大多数の学生にとっては、卒業こそ最優先すべき事柄だった。

記事はまた、専攻する学問ごとに、学生の試験廃止に対する立場が異なっている状況も伝えている。

たとえば文科の学生は、思想が最も発達していると評されている。彼らの多くは学者になりたいと希望しており、学位や卒業証書に対する関心は薄い。そのため試験廃止運動のなかで、「衆人に従って犠牲となるのも困難ではない」という⁽⁵⁸⁾。

これに対して法科の学生は、将来その多くが政治に関係する生活に従事しなければならず、したがって学位や卒業証書に依拠して、法律上の権利を取得せざるをえない。法科の学生のこのような振る舞いは、「勢いとしていかんともしがたい」⁽⁵⁹⁾。

文科と法科、二つの系統の学生いずれとも異なっているのが理科の学生である。理科の学生にとっては、平素からの実験・実習が成績評価の重要な部分を占めている。そのため、彼らは教室内の形式的試験を元々重視しておらず、今回の試験廃止運動に対して、事実上中立的立場に位置していた⁽⁶⁰⁾。

以上が北京大学の状況であった。この状況の下で行われた試験廃止の要求に、校長の蔡元培はどのように対応したのか。

まず蔡元培は、「試験の弊害について、あなた方の主張には道理がある」と理解を示し、また「試験により、人格の一部が損なわれることを私もまた承認する」と現行の試験に弊害があることを率直に認める。蔡元培はこれよりも先、北京高等師範学校を訪れた際に行った演説のなかで、現行の試験が順位の高低と点数の多寡のみを争うものとなっているために、学生相互の理解を深める「同情心」を減少させる一方、「嫉妬心」を増大させていると警鐘を鳴らし、「こうした試験制度は、科挙の余毒を受けており同情心を損なうので、改良しなければならない」とつとに説いていた⁽⁶¹⁾。試験制度の弊害に鋭敏な感覚をもっていたのである。

だが蔡元培は、試験廃止の要求には与しない。彼は試験廃止の要求が学生全体の総意ではなく、一部の急進的学生の主張にすぎないことを見透かした上で、いくつかの理由を列挙し、試験廃止を求める学生に反論した⁽⁶²⁾。

まず、論拠とされたのは、試験を廃止した場合、試験の実施を課している教育部令に抵触するということ、また今学期の試験を廃止すれば、次の学期以降も試験を廃止しなければならない、歯止めがきかなくなること、である。さらに一部の学生が求める、試験実施に代えて補習を行うという要求に対しては、2週間という短期間で、補習により今学期分の不足をすべて補うのは無理であるとの理由も示された。

以上の事情に加えて、蔡元培を特に憂慮させたのが、他校に及ぼす影響である。蔡元培は、全国にすでに試験廃止の気運が高まるなか、北京大学が試験を実施しなければ、学生は北京大学の方式で試験の廃止を要求して運動するだろうが、そうすると「全国の学校は破壊の状態に陥ることになる」との見通しをもっていた。この見通しのように事態が推移すると、運動に伴う混乱の責任を問う声は北京大学に集中するだろうが、北京大学の学生が十分に応答できるはずがないとの心配を、蔡元培はぬぐい去ることができなかった。

このように学生の主張に反駁したのち、蔡元培は五四に代表される愛国運動自体はよいものであり、のちにこの時期の歴史が描かれる場合、この愛国運動は肯定的に取り上げられることになるとも説いた。長期的な視野から、愛国運動に従事する学生に理解を寄せた見解を示したのである。だが、その上で蔡元培は、この愛国運動をめぐる歴史叙述において、試験廃止運動については、「蛇足を免れない」と切って捨てた。

蔡元培は、「去年の五四運動以降、一般の青年学生は空前の奮闘精神を抱き、彼らの貴重な時間を犠牲にし、多くの苦痛を堪え忍んで、国民に種々の警告を発するという仕事を成し遂げた。これらの努力は、すでに見るべき効果を上げている」と、五四運動以来の学生運動に惜しみない賛辞を送ってはいた。しかし同時に、運動に伴って生じた授業ボイコットによる損失が、甚大であるとも考えていた。そこで蔡元培は、「私の見るところ、学生は政治的運動において、国民の注意を喚起できるのみである。彼らの運動が上げうる効果は、こうしたものにすぎないのであって、それ以上増大させることはできない。彼らの責任はすでに尽くされた」との意見を述べた上で、「いまの学生にとって最も重要なのは、研究と学問に専心することである」と呼びかけ、学生にこれ以上は運動に従事せず、学問に立ち返るよう求めた⁽⁶³⁾。

そうである以上、蔡元培にとって学生が試験廃止運動に引き続き邁進することは、到底容認できるものではない。最終的に彼は、「学生が試験ボイコットをして、学生による愛国運動の名誉を犠牲とするのを願わない」との希望を吐露し、事態の収拾を図った。

直接交渉に出席した教授陣のうち、蔣夢麟と胡適は、蔡元培と同様の考えをつとに表明していた⁽⁶⁴⁾。二人は、「現在の学校の課程と教員には、確かに学生の求学の欲求を満足させられない点が多く存在するのだろう」と、学生の不満に理解を示しつつも、だからといっ

て、授業ボイコットのよう「破壊的攻撃」で事態の改善を目指してはならないと学生を戒める。そして代わりに、「建設的精神を用いて学校の改良を促進する」よう求めた。この立場から試験廃止の要求に対しても、「試験の廃止を要求するよりも、試験の改良を提唱するのがよい」という結論を、蔣夢麟と胡適は提示している。こうした結論をもつ二人は、当然に蔡元培を支持していたことだろう。

記事によれば、交渉終了後、学生側からはいかなる反感も生じず、そのほかの学生もこれを聞いて異議を唱えなかった。そしてそののち、新たに継続して要求が提議されることもなく、「北京大学の多数の学生は、いま試験の準備に従事している。すべての学生に卒業証書がいらないという痛切な覚悟があったわけではなく、試験廃止はすぐには実現しないだろう」⁽⁶⁵⁾との予測が示されるなど、北京大学における試験廃止運動は沈静化したようである⁽⁶⁶⁾。

北京大学で、蔡元培が試験廃止の要求を退けたのとはほぼ同じ頃、試験廃止運動の発端となった北京高等師範学校にも動きが見られた。

同校で教鞭を執る楊蔭慶は、試験が弊害を生んでいることは事実だろうが、それはあくまで在校生による意見だとした上で、専門家や卒業生の意見はどうか、多数に耳を傾けた科学的意見なのか、という疑問を呈した。試験廃止で一丸となっていたかに見えた北京高等師範学校で、試験廃止に懐疑的な意見が表明されたのである。

楊蔭慶は、「適切な試験は教員が教授法を改良する基準となり、学生を助ける機会となり、将来社会で仕事をする準備となる」との考えから、試験の廃止ではなく改良の可能性に目を向けようと訴える。その訴えのなかで特に強調されるのが、記憶の意義である。楊蔭慶によれば、記憶は理解という営為に深く関わっている。理解のためには過去の経験の参照が必須だが、それを実現するのは記憶の作用である。「理解を可能にするためには、優れた記憶力がなければならない」のである⁽⁶⁷⁾。そして必ずしも詳細な説明はなされていないが、この記憶を引き出し生かすべく、楊蔭慶は試験を活用したいと考えていたように見受けられる。

楊蔭慶と同様、北京高等師範学校の教壇に立っていた張耀翔も、試験廃止運動とは一線を画す議論を展開している。彼は現行の試験が、暗記の苦しみ、試験で課される作文のために字句をひねり出す苦しみ、試験終了後、採点者が自分の答案を受け入れてくれるかと恐れおののく苦しみ、を伴うものであり、その結果、嫉妬、自殺、精神病などが中国の学校に蔓延していると嘆いていた。彼もまた、現行の試験が、多くの問題を抱えていることを憂慮していたのである。

だが張耀翔は、そこから試験廃止の主張には進まない。彼は、旧来の試験は廃止しなけ

ればならないと説く一方、「方法を得た試験には、多くの効用がある」との考えから、「新法考試」という、心理学の知見を取り入れた新しい試験のあり方を模索し始めた。いままでのような余計な苦しみを与えない、だが学習の進展に役立てることのできる試験制度を構築すべく尽力したのである⁽⁶⁸⁾。

熱心に試験廃止を唱える学生を有し、名門校でもあった北京大学と北京高等師範学校は、試験廃止運動にとって二大拠点ともいえるべき学校であった。だが、前者で運動が事実上頓挫し、後者で試験廃止から新たな試験制度検討へと方針が転じたことは⁽⁶⁹⁾、試験廃止運動全体に影響を及ぼしたと考えられる。実際、それまでは連日新聞や雑誌を賑わせていた試験存廃に関する論争的論説は見られなくなり、運動そのものも下火となっていった。

VI なぜ試験廃止論は生じたのか

短期間で低調に陥ったとはいえ、試験廃止論が熱心に唱えられ、社会的に大きな注目を集めた事実是否定できない。それでは、そもそもなぜこの時期に、試験廃止運動が盛り上がりを見せたのだろうか。

まず挙げられる要因は、暗記の偏重や、曖昧な評価基準に由来する従来の試験に対する懷疑や不満が、学生はもちろん教師にも遍在していたということである。試験はそのままでは正当とは認定しがたい制度だったのであり、一部の急進的學生にとってはただちに否定の対象となったのである。

当時の中国で新文化運動が進展していたことも、試験廃止運動の高揚に与って力があっただろう。新文化運動では、それまで自明とされていた様々な思想や制度が、懷疑と検討の俎上に載せられており、試験もその追及を免れることはなかった。

また看過できない要因として、デューイの影響が挙げられる。1919年4月から1921年7月まで、中国に滞在したデューイは、中国各地で哲学や教育に関する講演を精力的に行った。その動向は逐一報道されており、またその講演内容の多くは雑誌や新聞に時を置かずして掲載され、講義録も出版されている⁽⁷⁰⁾。

そのデューイは、中国での講演で、試験についても、「われわれが必要とする知識は、紙片の知識ではなく、応用可能な知識である。だから、暗唱や記憶という方法では、学生の興味を引き起こせず学生に応用させられず、まったく効果がない」、「〔暗唱や記憶に基づく〕問答というものも、本当の試験方法ではない。本当の試験方法は、生徒が以後の生活において、その知識を応用して環境や状況に適応できるかどうかを考察するものである」との自説を説いている⁽⁷¹⁾。暗唱や記憶に偏重した試験に、批判のまなざしを向けていた

のである。デューイにとって、「共和主義の教育は、その主旨は人々に教育を受ける機会を与えることにあり、その方法は個性の尊重にある」ものでなければならなかったが、現行の試験のありさまはそれと矛盾するものだった。

故国のアメリカはもちろん、世界的にも知られた人士であったデューイに対する注目度は元々高いものがあつたが、弟子の胡適らがその紹介と称揚に努めたこともあり、中国でのデューイの声望はいや増していった。そのデューイが、試験に対して批判的意見をもっていたことは、中国の知識人を当然に刺激したであろう。そのことは、たとえばすでに言及した朱謙之の「試験に反抗する宣言」を想起すれば明らかであるし、「デューイ博士が中国にやってきて講演して以降、学界の多くの人——自ずと試験を課される学生が大多数を占める——は、「試験廃止」の狂熱症に罹患し、「試験廃止運動」に力を尽くして従事した」との評価も後年なされている⁽⁷²⁾。デューイの言動が、デューイ訪中以前に生じていた試験廃止運動を促進するのに与って力があつたことが窺われる⁽⁷³⁾。

だが、これらの要因以上に重要であつたのが、試験廃止運動を特に熱心に担った学生が、煩悶を抱える煩悶青年であつたと思われることである。この当時における学生・青年の煩悶に関する記述は大変に多いが、一つのわかりやすい説明では、煩悶は次のように論じられている。すなわち、「今の中国には多くの青年がいるが、一つの注意すべき状態にある。その状態とは、旧来の学術、思想、信条に対してはすでに信頼を失っているが、新しい学術、思想、信条をまだ得ることができず、心のなかに一種の空虚が突然生じているというものである。思想にはまだ頼れるものがなく、行為や挙措には標準がない。頭を掻いてためらい、どのようにするのがよいかわからない。これが広く見られる、いわゆる「青年の煩悶」である」⁽⁷⁴⁾。新文化運動の進展に伴い、青年は古いと考えられた価値をもはや信じることができず、捨て去ってしまっている。その一方で、新文化運動は揺らぎのない安定した価値を提示しているわけではない。青年は自ら新しい価値を求めなければならないが、それは容易には見当たらず、彷徨を余儀なくされていたのである。

この青年の煩悶に由来する現象として、「一方では一切を懷疑し、破壊を強く求める。他方では一切を武断し、慌てて建設を求める。思想には頼れるものがなく、感情は容易に動揺し、自殺や逃走などといった事案が生じる」との指摘もなされている⁽⁷⁵⁾。試験廃止運動もまた、一切を懷疑し破壊しようとする煩悶青年が、もがき苦しむなかで発動されたと推測することは十分に許されよう。

煩悶青年の顕著な事例として挙げられるのが、先にも触れた朱謙之である。朱謙之は五四の頃の自身を、「虚無主義」を信奉していたと規定した上で、次のように振り返っている。「虚無主義は、現代のあらゆる制度に根本的に反対し、否定的な方法から一切を批

評し、種々の偶像を打破し、種々の迷信を振り払うものである。虚無主義の方法は、すべて「否定」から出てくるものである。だから、私の当時の性格が最も好んだのは、人があえて発しない疑問を発することであり、最も痛恨だったのは、人が私の懷疑を阻止することだった。各種の問題は、「根本的に解決」しなければならないのである」。このように考える朱謙之の心情は、決して安定してはいなかった。

朱謙之自身の観察によれば、当時の彼は「あるときは発憤して意気盛んであり、あるときは隠れてしまいたいと思う。あるときは不平から革命を唱え、ほとんど発狂する。あるときは悲憤が頂点に達し、すぐに自殺したかった」、「自殺と革命という二大思潮が、私の生涯の大半を占めていた」という⁽⁷⁶⁾。朱謙之は激しやすく、自らの生命を否定しかねないほど揺れ動いていたのである。

ここに見られるのは、第一に悪しき伝統と考えられたものを徹底的に否定する姿勢であり、第二にしかし否定ののちに、それに代わる新しい思想的基盤を確立できず、伝統を拒絶する主体である自分自身もまた不安定に陥っているというありさまである。このような主体には、伝統や既存の制度について、漸進的・現実的に改良策を模索する余裕はなく、むしろ急進的・原理的批判へと向かいやすい。朱謙之ほどには極端ではなかったかもしれないが、以上の点はほかの煩悶青年にも共通する特徴であったといえるだろう。

前述したように、記憶の偏重に偏り、評価基準が曖昧な学校での試験は、科挙と結びついて批判的に想起されることがしばしばであった。そのために試験は、旧来の学術、思想、信条を集中的に反映した制度の一つとして、煩悶青年にとっては格好の攻撃対象となり、排撃の対象とされるようになったのである。

VII 試験廃止運動の限界

試験廃止運動は、試験方法の再検討を促したとはいえ、目的とした全面的な試験廃止を実現できたわけではなく、十分には成功しなかったといえる。そうした事態を導いた理由はいくつか考えられるが、容易に想起できるのは、北京大学の事例で確認できたように、学生内部の動機や利害が一致しておらず、心から試験廃止という理念に賛同していた者は決して多くはなかったという状況である。これでは運動の有効な展開は当然に難しかったであろう。関連して指摘しておくべきなのは、そもそも大多数の学生が、試験廃止運動に対してのみならず、五四を契機に生じた様々な政治的・社会的運動に熱心ではなかったという評価の存在である。

この評価によると、新文化運動に積極的に参加した北京の学生は、20パーセントに満

たず、残りの80パーセントは、多かれ少なかれ贅沢で退廃的な生活をおくっていた。また特に北京大学の学生に関しては、進歩的で政治運動を組織する者、道楽者、勉強熱心だがそれ以外のことには関わらない者という三つの類型に区分することができ、だれもがみな政治的・社会的運動に熱心だったわけではないという⁽⁷⁷⁾。

政治的・社会的運動の一つであった試験廃止運動も、同様の傾向を帯びることを免れなかったであろう。加えて、北京大学での試験廃止運動は、「〔その〕程度が激しくなればなるほど、〔その及ぶ〕範囲は益々狭くなる」と評されていたが⁽⁷⁸⁾、運動に熱心な学生が盛んに活動すればするほど、そのほかの学生の共感を得ることはかなわなかったようである。学生の内実がこのようであれば、運動の効果的拡大は望むべくもない。

試験廃止運動の拡大が進まなかった要因としては、それを主導した学生が、学外の人々、特に入学を希望する受験生のことをどれだけ真剣に考えていたのか、不明確であった点も挙げられよう。そのことが顕著となるのは、試験廃止論者の入学試験に対する対応である。

試験廃止をめぐる議論が巻き起こっているさなか、入学試験に関する情報が不足しているため、どの学校を志望すればよいのか判断が難しいという問題が生じている、との意見が寄せられていた。この問題の改善策として、各学校の試験問題を幅広く収集して冊子にし、学校への入学を希望する人々の閲覧に供することが提起された。この措置によって、入学志望者は志望校の情報を把握して学習意欲を高められるし、また試験問題の傾向を通じて、各学校の新文化運動に対する姿勢も明らかにできるというのである⁽⁷⁹⁾。

試験廃止が呼号されるなかで行われていた入学試験に関するこうした議論を、試験廃止論者が積極的に受け止め、それに寄り添う反応を見せた形跡は存在しない。また、臨時、学期、学年、卒業の四種の試験廃止を決議した北京高等師範学校考試制度研究会は、入学試験をその検討の俎上に載せてはいたものの、結局は結論を先送りになっていた。これから入学を希望する者にとって、どのような入学試験が行われているのか、もし入学試験が廃止されるとすれば、それに代わるどのような措置が講じられるのかといった点は重大な関心事である。だが、すでに学内に籍を置く在学生は、この関心事に十分に配慮し応答するのを怠っていたように見受けられる。

加えて気になるのが、女子学生に対する視点である。試験廃止を訴える論説のなかには、試験廃止には賛同しつつ、それまでの廃止論が男子学生の観点から着想されたもので、女子学生に対しては皮相を免れないと指摘するものが見られた⁽⁸⁰⁾。女性によって書かれたと思われるこの論説は、この欠点は正のために、女性がよりいっそう廃止論を研究するよう求めているが、この呼びかけへの反応は特になかったようである。また、この呼びかけがなされて以降、試験廃止論を中心的に担う男子学生が、勉学の意欲に燃える女子の存在

を考慮に入れて、議論を展開するようになったかどうかは疑わしい。

以上の点を考慮すると、煩悶学生を主たる担い手とする試験廃止運動は、試験制度の不備を是正し、教育の改善を目指すというよりは、まず何よりも、自らの煩悶をぶつけるべく発動された、自己本位的性格を強く有する運動であったといわざるをえない。自己に巣くう煩悶を何とかしたいという衝動が先行しているために、試験廃止運動の担い手は試験改良論者の意見に耳を傾ける余裕をもたなかったし、そのためもあって、試験廃止運動が、社会の広範な理解と支持を継続して獲得するのが困難であったのは、当然であったといえるべきかもしれない。

結びにかえて

本稿で考察した試験廃止運動は、前述したように、いくつかの限界を含み込んでいた。それにもかかわらず、短期間にせよ高揚を見せたのは、学生が抱え込んでいた煩悶が、それだけ根強かったことによるのだろう。

なお1930年代以降、試験廃止をめぐる論争が、再び一定の盛り上がりを見せたことが知られている。この論争が生じた大きな原因として、南京国民政府が1932年以降、全国の小学校と中学校の卒業試験（会考）を、統一的に実施し始めたことが挙げられる。この論争では、会考の求める卒業のための水準や、成績算出基準の地域による異なりなどを問題視して、その廃止を求める議論が出される一方、会考が教育の質や信頼を高めることに役立っているとして、その継続を求める主張もなされた⁽⁸¹⁾。この論争については、双方の主張いずれも、基本的に理性的で建設的なものであったとの評価がなされている⁽⁸²⁾。

この会考をめぐる論争と比較すると、本稿で検討した試験廃止の主張が、相当に急進的なものであったことは疑いを容れない。このことはこの運動が、煩悶という理性や論理では解消が容易ではない因子に、多分に突き動かされていた証といえそうである。

ところで、学生の煩悶は、この試験廃止運動を通じて、完全に解消されるものではもちろんなく、煩悶が広く蔓延していた状況は、こののちも容易に見て取れる⁽⁸³⁾。中国ではこののち1930年代にかけて、学生を主体とする政治的・社会的運動がたびたび生じたが、その根本には政治の乱れに対する不満や、諸外国による侵害への反発のほかにも、もっていきようのない煩悶を解消しようという意味も相当にあったのではないかと推測される。

だが、こうした観点から五四運動、そしてそののちの学生による運動を読み解く研究は、まだ必ずしも多くはなく⁽⁸⁴⁾、この推測の妥当性を検証するにはさらなる考察を要する。これは、今後の課題としておきたい。

【附記】 本稿は平成25・26年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

註

- (1) 北京大学廃除考試研究会「廃除考試制度的宣言」『時事新報』副刊『学灯』1920年7月1日。
- (2) なお近年、五四そのものを問うのではなく、五四がその後の中国でどう意味づけられたのかを問う研究が盛んになっている。この点については、次の業績が参考になる。吉澤誠一郎「五四運動から読み解く現代中国——ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手がかりに」『思想』第1061号、2012年9月。
- (3) 本稿の考察と関連する先行研究として、以下の業績が挙げられる。楊学為総主編、王奇生主編『中国考試通史 卷四 民国』首都師範大学出版社、2004年。民国時期の試験に関する通史であり、五四時期の試験をめぐる論争にも触れている。胡向東「民国時期關於教育考試問題的三次論争」『教育与考試』2008年第6期。民国時期、試験のあり方をめぐって三度の論争が生じたと整理し、そのうちの一度を本稿で扱う時期としている。なお、同氏による単著として、『民国時期中国考試制度的転型与重構』湖北人民出版社、2008年、もあるが、本稿で分析する五四時期の論争を詳細に分析しているわけではない。呂芳上『從学生運動到運動学生（民国八年至十八年）』中央研究院近代史研究所、1994年。学生運動と政治との関わりを議論するなかで、五四時期の試験廃止運動にも言及している。上記いずれの研究も、試験廃止をめぐる論争が最も多く掲載された『学灯』を十分に用いないなど、史料活用の点でなお多くの検討の余地が残されている。
- (4) 「学生學業成績考查規程」1912年10月25日。引用は、楊学為総主編、劉昕主編『中国考試史文献集成 第7卷 民国』高等教育出版社、2003年、26頁、に基づく。1920年3月22日には、新たな教育部部令として、「修正学生學業成績考查規程」が出されている。内容に若干の変更は見られるが、試験の実施により成績評価を実施するという方式に変化はない。同上書、27頁。
- (5) 邢定雲「學校考試之害及補救之法」『教育雜誌』第6卷第12号、1914年12月15日。
- (6) 江蘇第二師範學生張寿民「讀學校考試之害及其補救法書後」『學生雜誌』第2卷第5号、1915年5月20日。
- (7) この経緯の詳細は、余家菊「北京高等師範廢除考試制度的經過」『少年世界』第1卷第5期、1920年5月1日。国家主義の立場に拠る教育学の専門家として活躍することになる余家菊（1898–1976年）は、当時北京高等師範学校の学生だった。
- (8) 克書「考試問題」『学灯』1920年4月15日。馮克書は北京高等師範学校に1919年に入学し、卒業後は同校で編集された雑誌『平民教育』の編集主任を務めている。なお、以下でも取り上げるように、『学灯』には試験廃止を訴える複数の論説が掲載された。執筆者の経歴については不明な点も残るが、その過半は、北京高等師範学校の学生をはじめとする学生が占めたようである。たとえば、1919年10月18日に『学灯』に掲載された、「對於「教育革命」之管見」と題する論説は、同誌における試験廃止の口火を切る役割を果たしたが、その著者である趙康も学生であった。
- (9) もちろん、彼らが山東省の問題や五四運動に無関心であったとは考えられない。たとえ

ば馮克書は、1919年6月21日に家族宛にしたためた手紙のなかで、山東省の問題とそれが引き起こした五四運動について詳しく説明している(陳占彪編『五四事件回憶——稀見史料』生活・読書・新知三聯書店、2014年、88-90頁)。彼らは5月4日の運動などにも強い関心を寄せつつ、並行して試験廃止運動にも努力したといえよう。

- (10) 馮克書「請注意廢止學校現行考試法」『学灯』1919年12月21日。
- (11) 同上。
- (12) 克書「考試問題」『学灯』1920年4月15日。
- (13) 汪柢純「「廢棄試驗」問題之討論」『学灯』1919年10月30日。
- (14) 顏保良「我們對於「廢止現在學校考試制度」的意見(一統)」『北京大学日刊』1920年1月24日。顏保良は当時、北京高等師範學校に在籍していた。なお、『学灯』には1920年1月26日から31日にかけて、星之等なる著者により「我們對於「廢止現在學校考試制度」的意見」、と題する同名の論説が掲載されているが、その内容は『北京大学日刊』に掲載されたものと一致している。
- (15) 馮克書「請注意廢止學校現行考試法(統)」『学灯』1919年12月22日。
- (16) 克書「考試問題(統)」『学灯』1920年4月13日。たとえば、1914年、湖南某女子師範學校の學生である成某が、試験に合格できず入水自殺したこと、1917年、武昌高等師範學校の學生である劉某が、試験答案のできがよくないことから飛び降り自殺したことなどが伝えられている。
- (17) 「南京青年會學生自殺紀聞」『時事新報』1919年12月22日。
- (18) 顏保良「我們對於「廢止現在學校考試制度」的意見(一統)」。
- (19) 馮克書「請注意廢止學校現行考試法」。
- (20) 顏保良「我們對於「廢止現在學校考試制度」的意見(一統)」。
- (21) 馮克書「請注意廢止學校現行考試法」。
- (22) 汪柢純「「廢棄試驗」問題之討論」。
- (23) 馮克書「請注意廢止學校現行考試法」。
- (24) 馮克書「請注意廢止學校現行考試法(統)」。
- (25) 顏保良「我們對於「廢止現在學校考試制度」的意見(五統)」『北京大学日刊』1920年1月29日。
- (26) 以下で取り上げるように、『学灯』には試験廃止に反対する論説も複数掲載された。執筆者の経歴については、試験廃止論者同様、やはり不明な点が残るが、教員や一部の學生が過半を占めたようである。
- (27) 丁曉先「「廢棄試驗」問題之討論」『学灯』1919年11月27日。丁曉先は当時、小學校の教員であった。のちに商務印書館に入って出版業に携わるようになり、人民共和國では中華書局などの幹部を務めている。
- (28) 朱懷天「我對於廢止考試問題的意見——非閥制度」『学灯』1920年1月26日。朱懷天の経歴の詳細は不明だが、學校の教員を務める人物だった。
- (29) 丁曉先「「廢棄試驗」問題之討論」。
- (30) 王崇植「學校現在考試制度的改造」『学灯』1920年1月23日。王崇植は江蘇省の人で、当時南洋公學に在學していた。南洋公學卒業後、マサチューセッツ工科大学に学び、帰国後は大学教授などを経て、南京國民政府の資源委員會委員に就任している。王崇植については、石川禎浩「南京政府時期の技術官僚の形成と發展——近代中国技術者の系譜」『史林』

第74巻第2号、1991年3月、の記述が参考になる。

- (31) 丁曉先「「廃棄試験」問題之討論」。
- (32) 王崇植「学校現在考試制度的改造」。
- (33) 丁曉先「「廃棄試験」問題之討論」。
- (34) 王崇植「学校現在考試制度的改造」。
- (35) 王崇植「学校現在考試制度的改造（続）」『学灯』1920年1月24日。
- (36) 同上。
- (37) 王崇植「現行考試制度的討論」『学灯』1920年2月3日。
- (38) 同上。
- (39) 同上。
- (40) 同上。
- (41) 許応期「我對於考試的意見」『学灯』1919年1月29日。王崇植同様、許応期も当時、南洋公学に在学していた。同校卒業後はハーバード大学に学び、帰国後は大学教授を経て、資源委員会委員に就任している。文化大革命のおり、迫害を受け亡くなっている。
- (42) 王崇植「現行考試制度的討論」。
- (43) 吳鑑「駁「非廢止考試制度論」」『学灯』1920年4月9日。
- (44) 沈玄廬（1883-1928年）、名は定一。浙江省の人である。清末、日本への留学を経て中国同盟会に参加し、革命運動に従事する。『星期評論』編集のかたわら、マルクス主義研究会でも活動し、程なくして中国共産党員になっている。1923年には、中国国民党にも入党している。1925年に共産党を除籍され、そののちは西山會議派の一員として名を連ねるが、暗殺されて世を去っている。その事績については、次の研究に詳しい。R. Keith Schoppa, *Blood Road: The Mystery of Shen Dingyi in Revolutionary China*, University of California Press, 1995.
- (45) 玄廬〔沈玄廬〕「考試与畢業」『星期評論』第38号、1920年2月22日。
- (46) 漢俊〔李漢俊〕「我的「考試畢業」觀」『星期評論』第44号、1920年4月4日。
- (47) 王崇植「再同沈玄廬君的「考試与畢業」」『学灯』1920年3月19日。
- (48) 王崇植「学校現在考試制度的改造」、によると、上海の多くの学校の学生が、試験の廃止を希望しており、また特に浙江省の嘉興中学では、そのために授業ボイコットや教員を無視した勝手な学習が行われるといった事態が生じていた。嘉興では、学生により愛国団や学生連合会が作られるなど、愛国運動が熱心に進められており、試験廃止運動もその一環として発動されたと考えられる。当時の嘉興の学生運動の状況については、「学生組織愛国団」『申報』1919年5月24日、「嘉興学生潮之滬訊」『申報』1919年7月23日、などの記事を参照。
- (49) 「我們的旨趣」『北京大学学生週刊』第1号、1920年1月4日。
- (50) 列悲「敬告教職員諸君」『北京大学学生週刊』第1号、1920年1月4日。
- (51) 暉明「廢止學校的考試制度」『北京大学学生週刊』第4号、1920年1月25日。
- (52) 「本校新聞 廢止考試研究会之發起」『北京大学学生週刊』第12号、1920年3月21日。「廢止考試研究会」は、冒頭で取り上げた「廢除考試研究会」と同一団体であると考えられる。
- (53) 朱謙之「反抗考試宣言」『北京大学学生週刊』第13号、1920年3月28日。朱謙之（1899-1972年）は、のちに哲学や歴史学などで多くの業績を上げ、中山大学や北京大学で教鞭を執った。当該時期の朱謙之については、海青「朱謙之的“自殺”与“自我”」同『『自殺時代』的来临？——二十世紀早期中国知識群體的激烈行為和價值選択』中国人民大学出版社、2010年、に

詳しい。

- (54) 「哲学系学生朱謙之君与蔣夢麟教授来往函札」『北京大学日刊』1920年3月30日。
- (55) 野雲「北京通信——北大考試問題已告一段落」『申報』1920年6月3日。
- (56) 「北京通信——北大廢考運動之頓挫」『申報』1920年6月8日。
- (57) 同上。
- (58) 野雲「北京通信——北大考試問題已告一段落」。
- (59) 同上。
- (60) 同上。
- (61) 蔡元培「在北京高等師範学校『教育与社会』社演説詞」『教育与社会』第1巻第1号、1920年4月15日。引用は、高平淑編『蔡元培全集』第3巻、中華書局、1984年、395-396頁。
- (62) 「北京通信——北大廢考運動之頓挫」『申報』1920年6月8日。
- (63) 蔡元培「去年五月四日以来的回顧与今後的希望」『晨報』（五四紀念増刊）1920年5月4日。
- (64) 蔣夢麟・胡適「我們對於学生的希望」『晨報』（五四紀念増刊）1920年5月4日。文章を執筆したのは胡適であるとされるが、蔣夢麟も文章の趣旨には当然賛同していたと考えられる。
- (65) 「北京通信——北大廢考運動之頓挫」。
- (66) 本稿冒頭に掲げた「廢除考試制度的宣言」は、したがって、実は運動が下火となりつつあった際に出されたものであったといえることができる。運動をもう一度盛り上げるというねらいがあったかもしれないが、事態の経過から見て、ねらいは外れたと評価できよう。
- (67) 楊蔭慶「對於顏保良先生「廢止現在学校考試制度的意見」之批評」『教育叢刊』第3集、1920年6月。楊蔭慶（1889-？）は教育者。コーネル大学とロンドン大学で学ぶ。1917年以来、北京高等師範学校で教鞭を執っていたという。
- (68) 張耀翔「新法考試（甲種）」『教育叢刊』第2巻第1集、1921年3月。張耀翔（1893-1964年）は心理学者。コロンビア大学で学び、1920年に帰国。同年、北京高等師範学校に心理学実験室を開設し、同校で講義も担当した。
- (69) 北京高等師範学校教育叢刊編輯処が編集業務を担うかたちで、1919年12月から刊行が開始された雑誌『教育叢刊』には、「新法考試」に関連する論考が多数掲載されている。その一方で、試験廢止を明確に訴える論考としては、馮克書「学校考試問題之研究」『教育叢刊』第2集、1920年3月、が存在する程度であり、同校において、試験廢止という論調が相当に弱まったことが看取できる。
- (70) この点は、元青『杜威与中国』人民出版社、2001年、に詳しい。
- (71) 朱毓魁記「平民教育之真諦」新学社編『杜威在华演講集』1919年。中国到着後、まだまもない1919年5月7日、デューイは浙江教育会で同名の講演を行っている。引用は、袁剛ほか編『民主主義与現代社会 杜威在华講演集』北京大学出版社、2004年、362-364頁、に基づく。
- (72) 孫德中「對於考試問題一点平庸的意見」『新教育評論』第1巻第11期、1926年2月。引用は、楊学為総主編、劉昕主編『中国考試史文献集成』第7巻（民国）94頁、に基づく。
- (73) ただし、デューイ自身が中国での試験廢止運動に明確に支持を与え関与したかといえ、そのようなことはないであろう。デューイの中国での議論は、現行の試験の問題点を突く段階にとどまっていたと思われる。ここからは試験廢止の主張を引き出すことが確かに可能だが、試験改良の主張を導くこともまた可能である。したがって、デューイの弟子であっ

- た蔣夢麟と胡適が、試験廃止の主張に与さなかったことは、決して不自然ではない。
- (74) 白華「青年煩悶解救法」『学灯』1920年1月30日。著者の宗白華（1897-1986年）は、後に美学者・哲学者として知られることになる。当該記事執筆当時は、『学灯』の編集に参加していたが、程なくドイツ留学へ出発している。
- (75) 同上。
- (76) 朱謙之『回憶』現代書局、1928年。引用は、黄夏年編『朱謙之文集』第1巻、福建教育出版社、2002年、45頁、に基づく。
- (77) Chow Tse-tsung, *The May Fourth Movement: Intellectual Revolution in Modern China*, Stanford University Press, 1960, pp. 96-97. 羅敦偉『五十年回憶錄』中国文化供給社、1952年、24頁。以上の言及については、以下の研究による。Timothy Weston, *The Power of Position: Beijing University, Intellectuals, and Chinese Political Culture, 1898-1929*, University of California Press, 2004, p. 192.
- (78) 「北京通信——北大廃考運動之頓挫」。
- (79) 雲卿「編輯入学試験問題目的商榷」『学灯』1920年4月11日。朱錫昌「編輯入学試験題目的弁法」『学灯』1920年4月15日。
- (80) 雪梅女士「對於「廃止学校現行考試法」的意見」『学灯』1919年12月30日。
- (81) 楊学為総主編、王奇生主編『中国考試通史 卷四 民国』351-365頁。
- (82) 胡向東「民国時期關於教育考試問題的三次論争」35頁。
- (83) 一例として、商務印書館が、10代から20代の男子学生を主たる対象に発行していた雑誌『学生雑誌』には、煩悶を抱える読者から、自らの悩みを吐露する投稿が常に寄せられていた。『学生雑誌』については、王飛仙『期刊、出版与社会文化變遷——五四前後的商務印書館与『学生雑誌』』国立政治大学歴史学系、2004年、を参照。
- (84) この点につき示唆に富む業績として、王汎森「「煩悶」の本質是什麼——「主義」与近代中国私人領域的政治化」『思想史』第1期、2013年9月、がある。